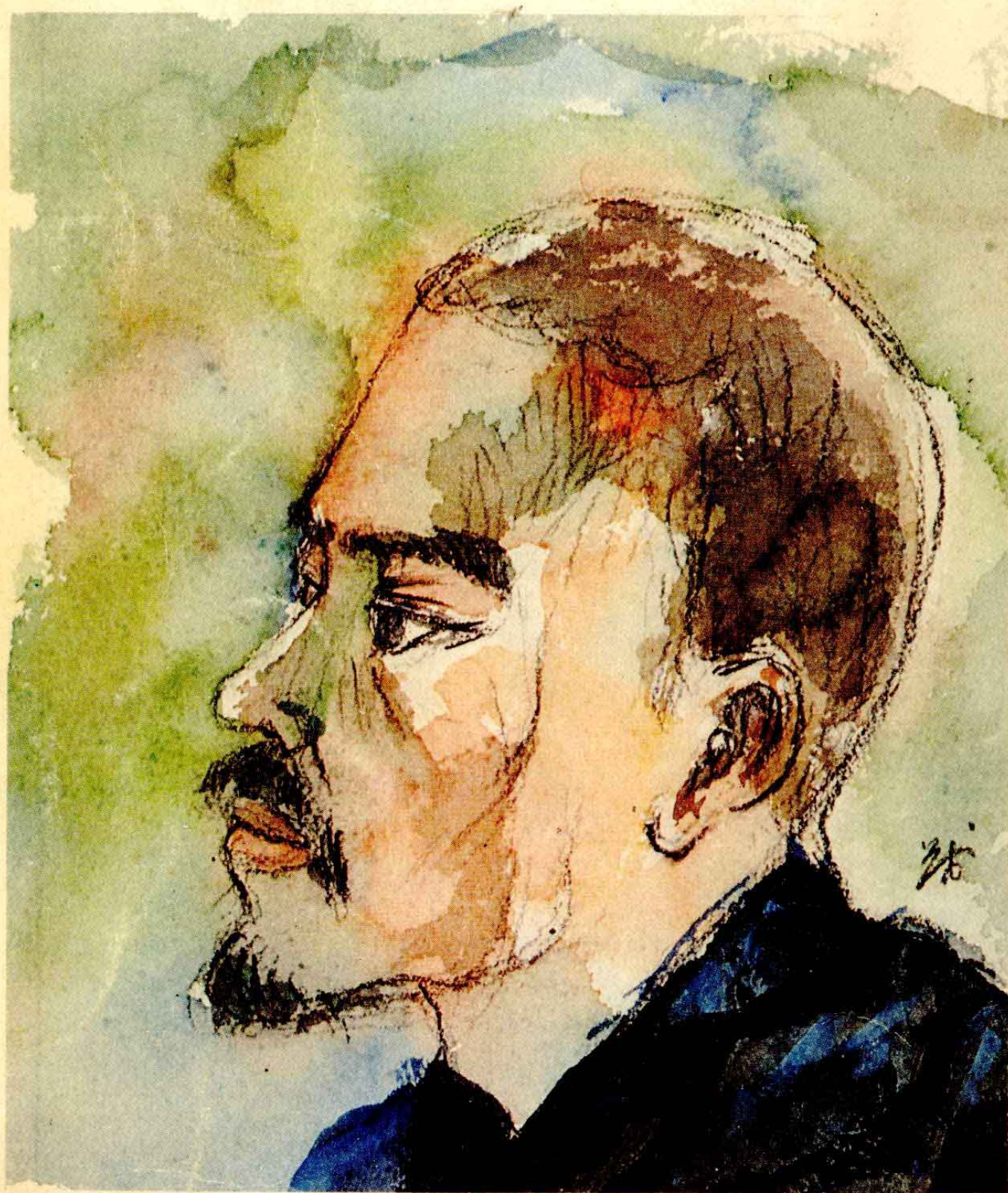


文芸読本

# 正岡子規



読本 正岡子規

初版発行 昭和五十七年三月二十五日

発行者 清水 勝

発行所 株式会社 河出書房新社

〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二

電話 東京 四〇四―四二〇一 (営業)  
四〇四―八六一一 (編集)

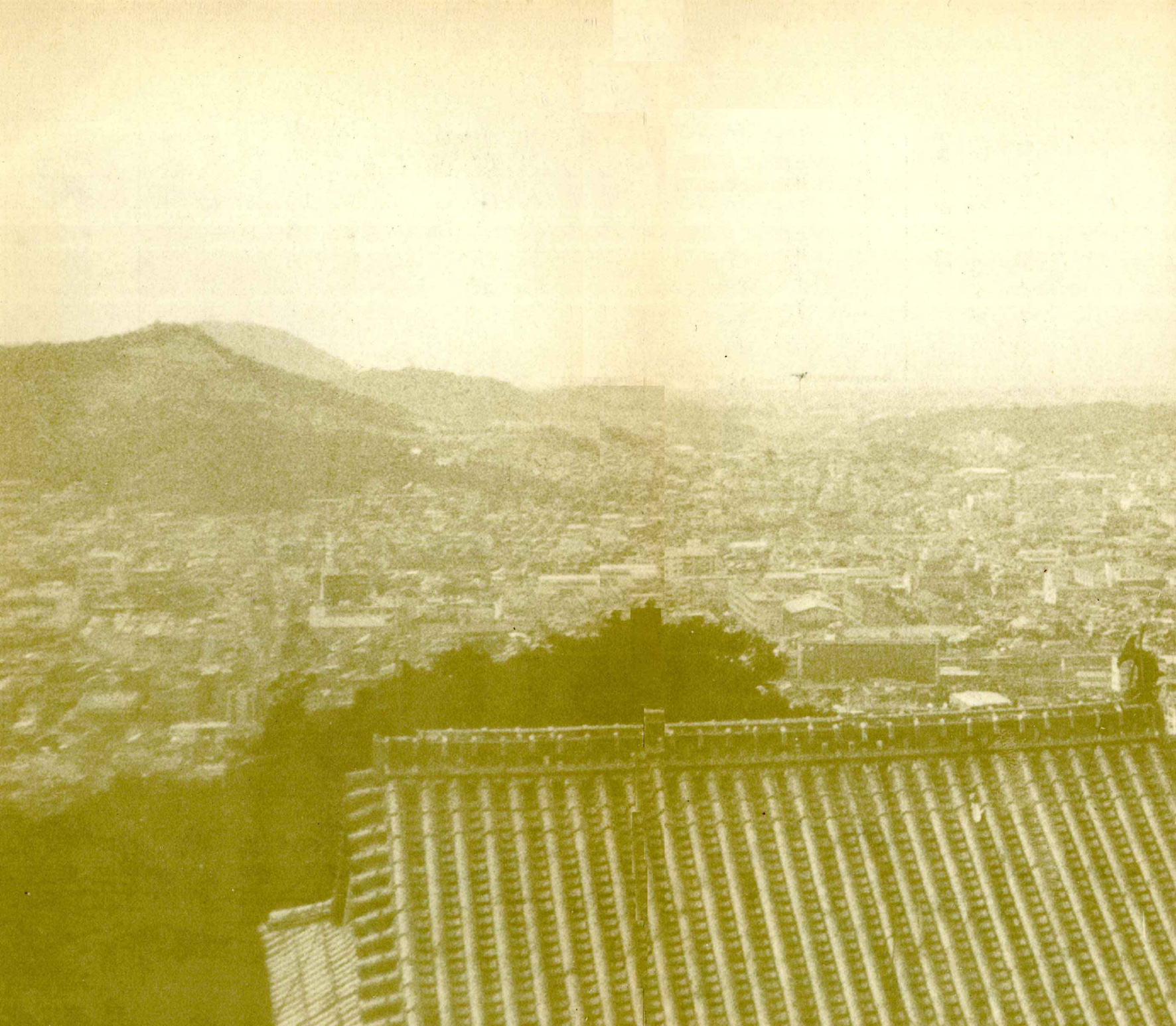
振替 東京〇―一〇八〇二

印刷 東洋印刷株式会社

製本 和田製本工業株式会社

落丁本乱丁本はお取りかえいたします

Printed in Japan



〈対談〉

# 短歌の出発

大岡 信  
三好行雄

81

「仰臥漫録」

子規「写生」の二面

子規のモンタージュ論

写生と生き方と美感

痰一斗

子規の一首

庄野潤三

98

金子兜太

99

五木寛之

101

桶谷秀昭

103

吉増剛造

106

佐佐木幸綱

104

正岡子規

夏目漱石

147

子規居士と余

高浜虚子

149

升さんと食物

河東碧梧桐

155

竹の里人

長塚 節

160

作品子規岡正

寒山落木(抄)

163

竹の里歌(抄)

179

歌よみに与ふる書

197

俳諧大要(抄)

209

病牀六尺(抄)

220

子規書簡

17 33 51 74 97

仰臥漫録

25 119 133 177 196

正岡子規年譜

正岡子規の参考文献

松井利彦  
松井利彦

240

236

表紙Ⅱ正岡子規・田沢茂／目次裏Ⅱ松山市全景  
目次・本文カットⅡ二俣英五郎／扉・本文カットⅡ手代木克信





## 正岡子規

斎藤茂吉

44

## 正岡子規論

山口誓子

52

## 沈潜期の作品

加藤楸邨

60

## 正岡子規

木俣 修

72

## 正岡子規の歌

近藤芳美

68

## 『病牀六尺』の世界

山本健吉

10

## 「薄ッぺらな城壁」をめぐる

杉浦明平

108

## 正岡子規

寺田 透

18

## 正岡子規におけるフォームルの問題

久保田正文

134

## 詩人・子規の出現

坪内稔典

121

## 子規の根源的テーマ系

大江健三郎

26

## 正岡子規について

正宗白鳥

33

## 子規の歌の暗示

折口信夫

37

## 物質への情熱

小林秀雄

34

## 正岡子規五十年忌に因んで

吉野秀雄

41

## 子規の俳論

伊東静雄

39



# 正岡子規アルバム



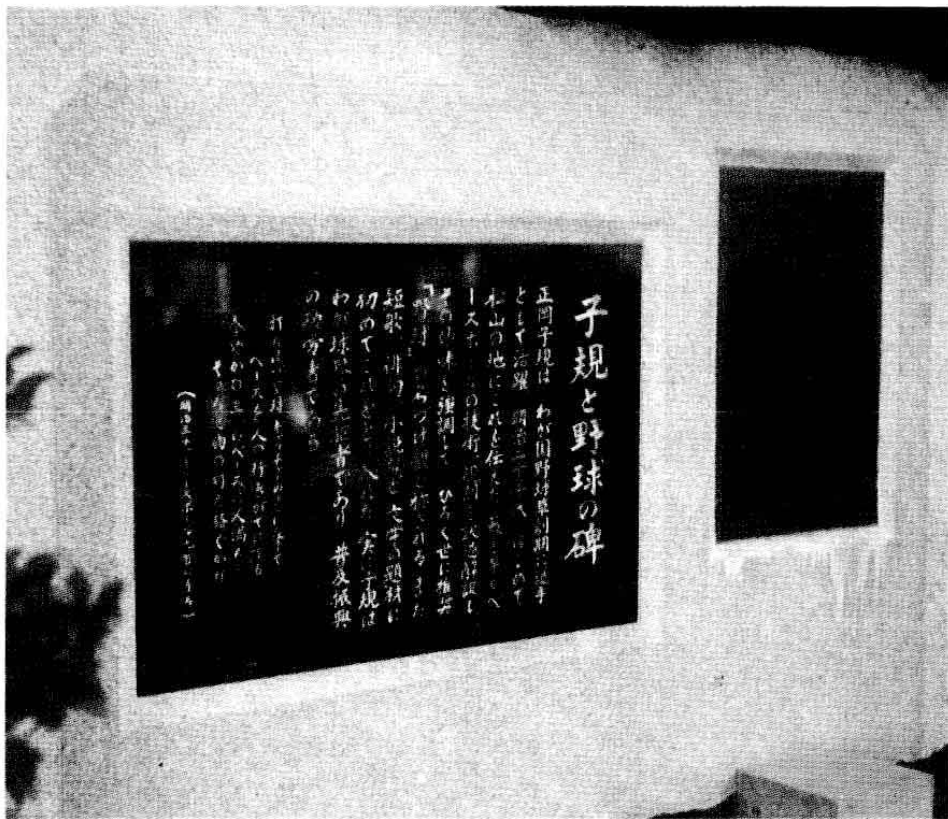
子規自画像



子規の絵（同右）



子規の絵(仰臥漫録)



「子規と野球の碑」(松山市・正宗寺境内)



旅立つ子規

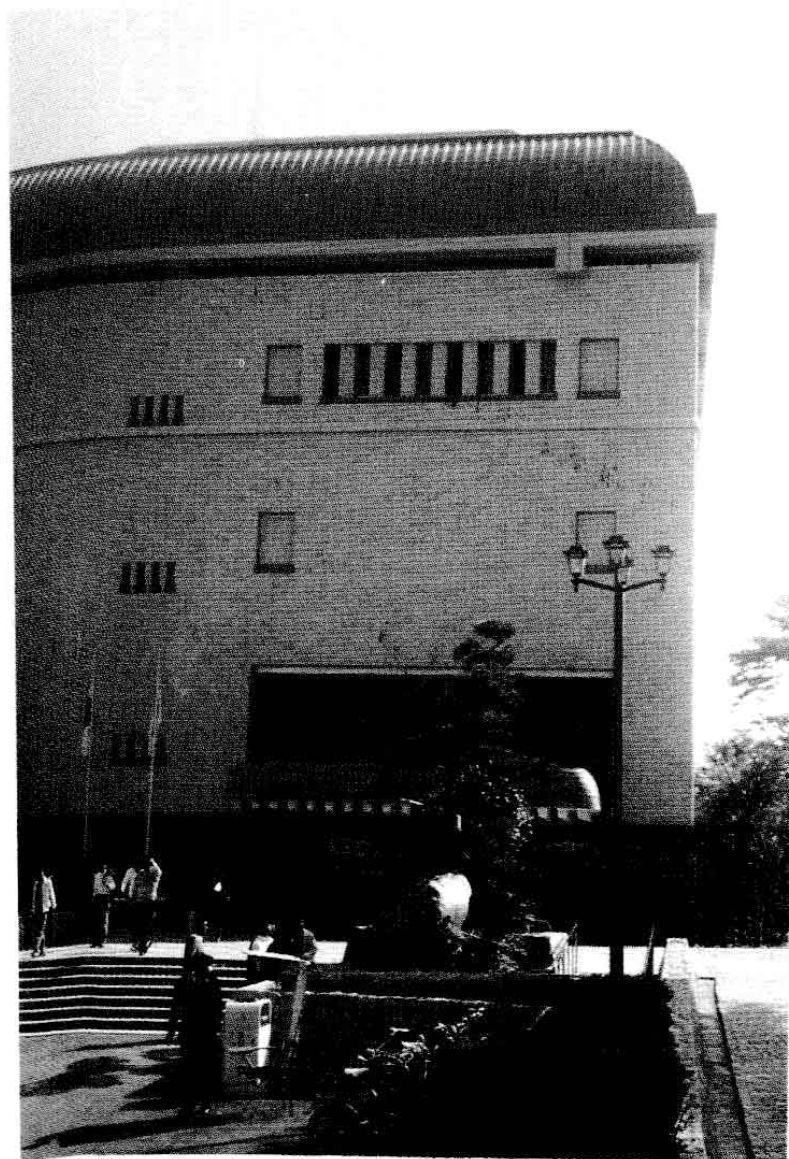


松山市正宗寺境内に再建された子規堂。  
左は、その内部にある勉強部屋





松山城。「松山や秋より高き天守閣」



松山市道後にある子規記念博物館



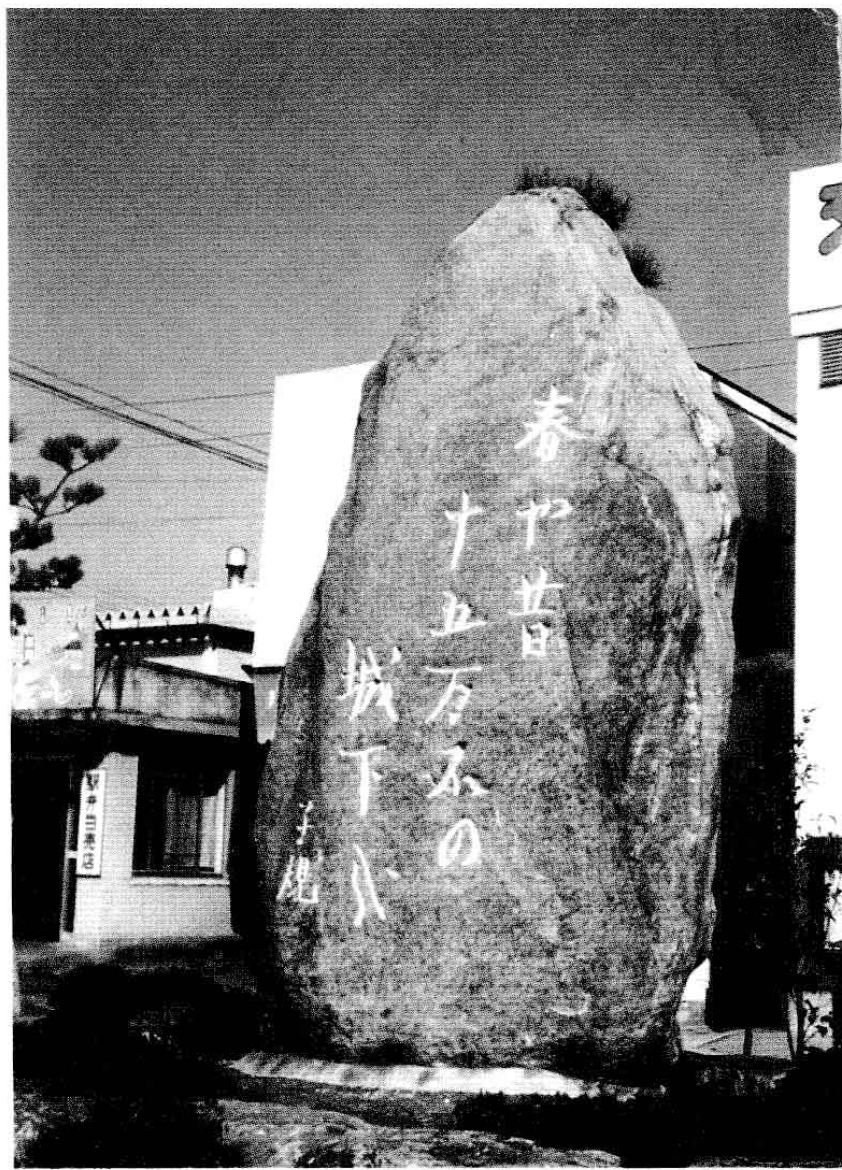
松山郊外にある石手寺(四国霊場51番札所)。  
「石手寺へまはれば春の日暮れたり」



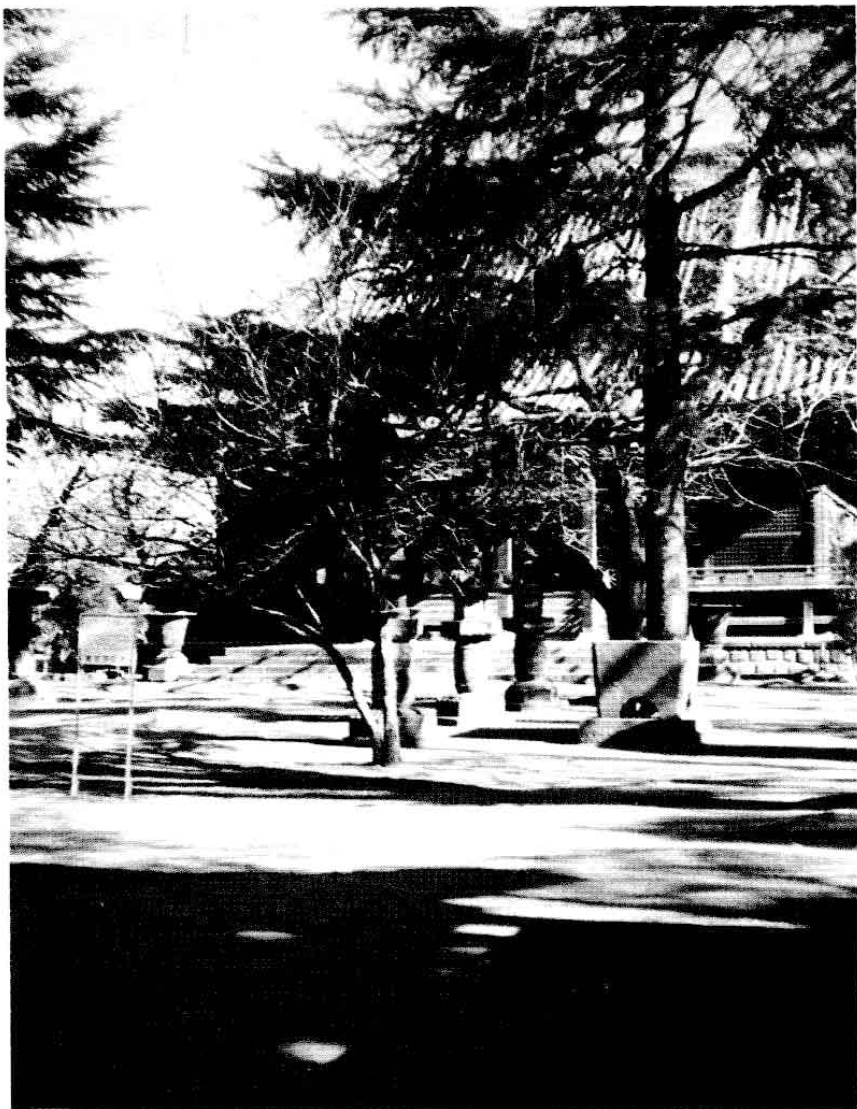
石手寺の近くを流れる石手川。  
「若鮎の二手になりて上りけり」



子規記念博物館の庭にある子規歌碑。「足なへの病いゆとふ  
伊予の湯に飛びても行かな驚にあらませば」



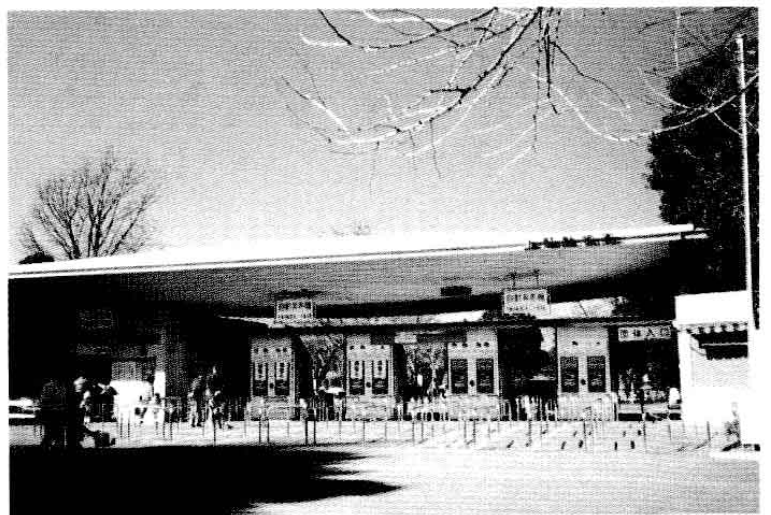
国鉄松山駅前にある子規句碑。  
「春や昔十五万石の城下哉」



上野・寛永寺。子規は、この寺で打ち鳴らす鐘を聞きながら  
暮した。「行く秋の鐘つき料を取りに来る」

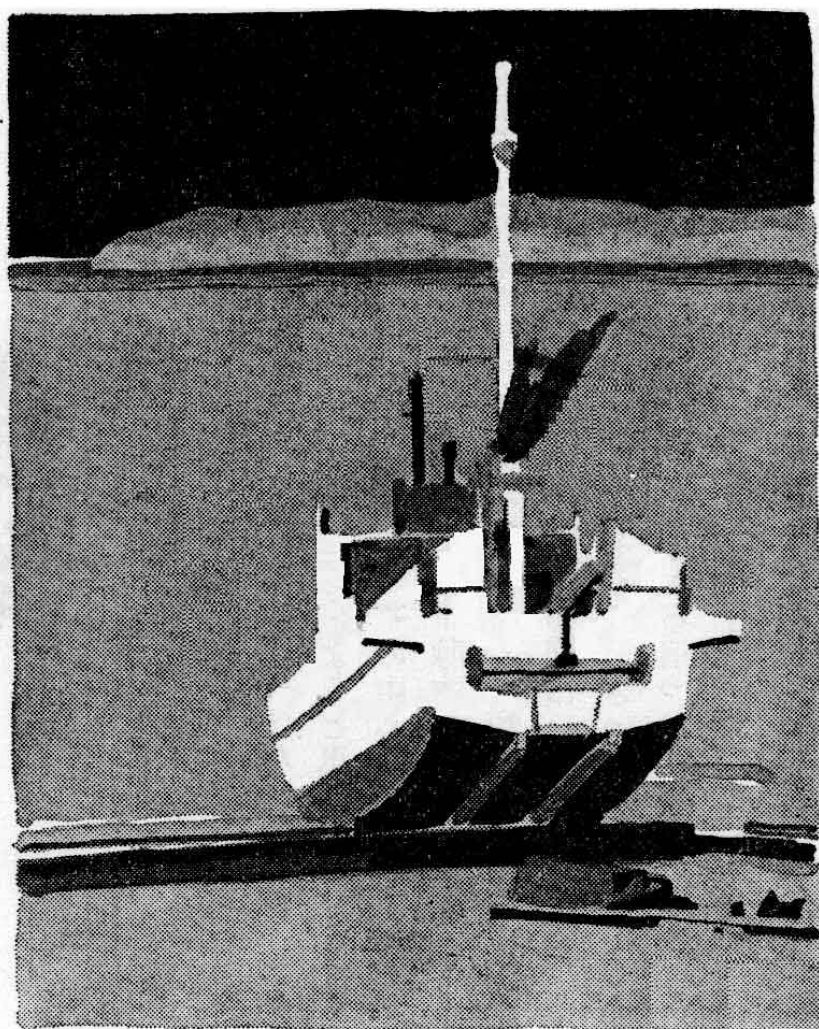


東京・上野公園。「臥しながら雨戸あけさせ朝日照る  
上野の森の晴をよろこぶ」



上野動物園。「上野山日ぐれて虎の吼ゆるなり  
虎かひ人や餌を忘れけん」

文芸読本  
正岡子規



河出書房新社

# 『病牀六尺』の世界

## 一

ドナルド・キーン氏と子規や啄木について語り合ったことがある。子規は短歌と俳句、啄木は短歌と新体詩によって、その名声は支えられているのだけれども、自分は子規の随筆、あるいは啄木の日記に一番心を惹かれる、とキーン氏は言う。これは今日、ことに桑原武夫氏の『第二芸術論』以来、短歌や俳句がひどくその魅力を喪失して以来、多くの人の共鳴する考え方であるかも知れない。

だが、キーン氏は言うのである。「もしも子規が俳句・短歌をひとつも詠まないで、日記ばかりを書いたとすれば、誰も読まないでしょう。」同様に啄木が、何時までも青年たちに愛誦される『一握の砂』や『悲しき玩具』の作者でなかったら、あれほどローマ字日記の刊行が待ち望まれることもなかったであろう。

このことは、われわれの心に焼きついている子規や啄木のイメージが、俳句の作家あるいは短歌の作家であって、決して随筆家ある



山本健吉

いは日記の筆者ではないということの意味する。詩人としての子規や啄木に触れようと思うなら、やはりその俳句や短歌や新体詩などの解明が、その中心になるのである。

だが、——啄木はしばらく置く——子規のものでは、俳句より短歌の方が面白く、短歌より随筆の方が面白く、随筆より日記（『仰臥漫録』）の方が面白い、と言いたくなる気持も自然に起ってくるのである。そう言いきってみて、しかしそう割切って言うことへの不安が、あとから追っかけて来ることも事実なのだが——。その気持の根底には、子規を詩人として見るよりも、一個の生活者、あるいは人間として見て、より深く親愛を寄せたくなるような要素が、確かにあるのだ。言ってみれば、子規の世界は「病牀六尺」の世界であり、子規の芸術は「仰臥漫録」の手すさびに過ぎないということだ。六尺四方の限られた世界に、この上なく生きる意志の旺盛な一人の男が投げこまれた場合、彼はどのような生き方を示すか。彼はその貪婪で健啖で爛々と燃える眼、好奇に溢れる心によって、その

六尺の世界をどのような豊かな小宇宙に化するか。その解答が取りも直さず子規の晩年の文学なのである。

## 二

私はあまりに早く、子規の文学の結論を持ち出してしまったようである。しばらく退いて、『仰臥漫録』の魅力について考えてみたい。

これは死ぬ一年ほど前の、明治三十四年九月三日から十月二十三日までの日録と、翌年三、六、七月の断片的な日記とを、発表するつもりなく書きつけて置いた二冊の稿本である。そこには日々三度の食事の献立から、間食、薬餌、便通に至るまで記し、訪問者、出来事、病苦その他の感想、俳句、略画まで入れ、雑然たる体裁の中に、その病床生活を生き生きと再現しえている。これは大正七年に、原本大の複製本が岩波書店から出されて、はじめて世の注目を惹いたのである。ことに食事の献立を洩れなく記載していることは、子規の人柄も現れて、いたく読者の興味をそそった。

たとえば、九月四日の献立として、次のような記載がある。

朝 雑炊三碗 佃煮 梅干

牛乳一合コ、ア入 菓子パン二個

昼 鰹ノサシミ 粥三碗 ミソ汁 佃煮

梨二ツ

葡萄酒一杯（コレハ食時ノ例ナリ）

間食 芋坂団子ヲ買来ラシム（コレニ付悶着アリ）

アン付三本焼一本ヲ食フ 麦湯一杯 塩煎餅三枚 茶一碗

晩 粥三碗 ナマリ節 キャベツノヒタシ物 梨一ツ

こういう記載が毎日つく。そしてそのあいだに、「此頃食ヒ過ギテ食後イツモ吐キカヘス」とか、「今日夕方大食ノタメニヤ例ノ左下腹痛クテタマラズ暫ニシテ屁出デ筋ユルム」とか、「今日ハ週報募集句検閲ノ日ナレバトテ西瓜ヲ買ハシム西洋西瓜ノ上等ナリ一度ニ十五キレ程クフ」とか、「鰹ノサシミニ蠅ノ卵アリソレガタメ半分程クフ、晩飯ノサイニ買置タルワラサヲサシミニツクル旨クナシ食ハズ」とか、「ネジパン形菓子パン半分程食フ堅クテウマカラズ因テヤケ糞ニナツテ羊羹菓子パン塩煎餅ナドクヒ洪茶ヲ吞ムアト苦シ」とかいいた記事を挿んでいる。

私は『仰臥漫録』を読むごとに、この食事の記載を仔細に読む。病者の胃の具合を考え、運動不足にもかかわらず強健な彼の胃の消化力を想像し、「雑炊三碗」とか「菓子パン二」とか「アン付三本焼一本」とかいいた食物の量と質とをとともども考え、それが胃の腑に落着く満足感を推量しながら、読み進む。

私にはそれが、病床生活の記録として、すこぶる具象性に富んでいるように思われる。少くとも、『断腸亭日乗』に、

胡麻油一合 金拾五円

米利堅粉百目 金参拾円

牛肉百目 金貳拾五円

牛酪百目 金五拾円

などと書き、また、

午前雪子来り干瓢葛粉鶏卵を恵まる、野村氏また炭及小豆一合を贈らる、

などと書きながら、肝腎の食事の献立はすこぶる具象性を欠いているのよりも、興味が深い。食糧の闇値の記事は、当時の世相風俗を

知る好資料とは言えよう。だがおのれの生活の記録としては、荷風は子規ほど飾らない天真爛漫の記録を読者に提供してくれはしない。つまり、日記文学が味わせてくれる醍醐味において、荷風はついに子規に及ばないのだ。

### 三

戦争末期のような食糧難の時代に、人の日常の意識の大きな部分が食糧のことに行くのは、自然のなりゆきであろう。その自然さに、荷風の筆は到達していない。もっとも私は、自分の欲望をそのまま描き出すのが日記の真骨頂だと言っているわけではない。私はただ、筆者の生活を彷彿と現前せしめる記録文学として、荷風のよそよそしさは、ついに子規の天真爛漫に及ばぬ、と言っているだけである。そしてその場合、子規が丹念に記した三度々々の食事の献立が、私には彼の病床生活を潑刺と写し出す。

病床に釘付けになった病人の意識は、大半食事のことによって占められているであろう。その日何を食おうかと思ひめぐらすことが、病人の大きな楽しみの一つであったことは、確かだろう。ことに子規は、健啖さにおいては、健康人をしのぐものがあつた。たくましい精神、たくましい意志は、運命をわがものとして愛するすべを心得ているものである。彼は「粥三碗」「焼鴨三羽」「菓子パン大少数個」「マグロノサシミ」などという品目を、如何にも楽しげに数え上げる。それはただの品書きに過ぎないが、それを一つ一つ書きつける子規の心の動きを、そこに辿ることもできるのである。しばしば「晩飯後腹ハリテ苦シ」「食過ノタメカ苦シ」「便通及縋帶トリカヘ腹猶張ル心持アリ」などと、書きこまなければならぬ。その

苦痛は当然予想できることでありながら、なおかつ彼はうまいものをむさぼり食わないではいられない。私にはそれは、肉体の欲望であるばかりでなく、心の渇きでもあつたようにすら思えてくるのだ。

病床の苦痛は私たちの想像の外だが、その苦痛を弱々しく訴えたりはしない。『病牀六尺』の百二十二回から百二十五回まで、つまり死の八日前から五日前までの文章には、「五体すきなしの拷問」のような極度の苦痛について述べているが、そこでは自分の苦痛をあたかも他人の苦痛のように、客観化して述べているのである。『仰臥漫録』においては、もちろん人に見せるための文章ではないから、訴えの意図を初めからもっていない。ただ、そこでは自分の備忘として、苦痛の叙述があるのだ。

「一兩日来左下横腹（腸骨カ）ノトコロイツモヨリ痛ミ強クナリシ故ホータイ取替ノトキ一寸見ルニ真黒ニナリテ腐リ居ルヤウナリ定メテ又穴ノアクコトナラント思ハル捨テハタカラダドーナラウトモ構ハヌコトナレドモ又穴ガアクカト思ヘバ余リイ、心持ハセズコノコト氣ニカカリナガラ午飯ヲ食ヒシニ飯モイツモノ如クウマカラズ食ヒナガラ時々涙グム」

そしてこの二日ほど後には、精神的な逆上が来る。

「五日ハ衰弱ヲ覺エシガ午後フト精神激昂夜ニ入りテ俄ニ烈シク乱叫乱罵スル程ニ頭イヨ／＼苦シク狂セントシテ狂スル能ハズ独リモガキテ益々苦ム遂ニ陸翁ニ来テモラヒシニ精神ヤ、静マル陸翁ツトメテ余ヲ慰メ且ツ話ス余モツトメテ話ス九時頃就寝シカモウマク眠ラレズ」

その数日後には、死の誘惑と戦わなければならぬ。同時に死の恐

怖とも戦わなければならぬ。

「サア静カニナツタ此家ニハ余一人トナツタノデアル余ハ左向ニ寝タマ、前ノ硯箱ヲ見ルト四五本ノ禿筆一本ノ驗温器ノ外ニ二寸許リノ鈍<sup>ニ</sup>イ小刀ト二寸許リノ千枚通シノ錐トハシカモ筆ノ上ニアラハレテ居ルサナクトモ時々起ラウトスル自殺熱ハムラ、ト起ツテ来タ……矢張刃物ヲ見ルト底ノ方カラ恐ロシサガ湧イテ出ルヤウナ心持モスル今日モ此小刀ヲ見タトキニムラ、トシテ恐ロシクナツタカラジツト見テキルトモカクモ此小刀ヲ手ニ持ツテ見ヨウト迄思フタヨツポド手デ取ラウトシタガイヤ、コ、ダト思フテジツトコラヘタ心ノ中ハ取ラウト取ルマイトノ二ツガ戦ツテ居ル考ヘテ居ル内ニシヤクリアゲテ泣キ出シタ」

このようなのが、命旦夕に迫ったことを自覚した者の、心の葛藤であった。そのような心の内面が、この『仰臥漫録』ではちらと顔をのぞかせようとする。それを他人へ訴えようとする心の姿勢は、彼にはない。おそらく、そのような訴えの衝迫を、あえて圧えようとするところに、東洋の古来の文学者の志はひらけたのである。現実の生活の苦痛が、そのままより次元の高い世界に転化しないかを試みる。作品を作り出せばそれで足れりとするのではない。作品だけでなく、生活そのものが次元の違った世界へ移調されなければならないのだ。生活が作品に化し、芸術とならなければならないのだ。生活とはこの場合、与えられた六尺の小天地である。その小天地には、雨にけぶる上野の山が見え、十四五本の鶏頭が生え、寛永寺の鐘がきこえ、藤の花房が瓶にさされ、庭の棚から糸瓜がぶら下っているのが見える。それは彼が毎日食膳の上のものを「カジキノサシミ」「葡萄一房」「生鮭照焼」「ハゼ蛤佃煮」などと数え上げる

のと同じく、変りばえのしない眺めである。彼は巢を張った蜘蛛のように、その六尺の天地に現れるものに猶予なく掴みかかることしか許されないのだ。だがそれだけが与えられたものなら、それをこの上なく尊重し、鍛え上げるのが、「写生」という物を飽くなく凝視めようとする意志のつとめである。その意志が、なまの現実を拒絶して、六尺の小宇宙を現前させる。

#### 四

子規の文学のもっとも大きな顕彰者は斎藤茂吉であって、高浜虚子はさほどではない。子規の俳句にしても、そのもっともよいものをことさら賞揚していないが、これは変な臆測をすれば、虚子の不明からというより、故意に眼をつぶったということがあるようである。虚子は自分の俳句観なり、自分の句境なりを守ろうとする本能的欲求があつて、それを犯さない限りにおいて、子規の人と文学とを説いたのである。そういう老獪さが虚子にはあつた。それとともに、子規よりは自分の方が偉いのだ、子規は中道で仆れたから、俳句も文章もそれほどの深みにはいつてはいないが、自分はその境からは一歩も二歩も出ているのだ、という自負があつた。ただし、短歌については門外漢として、一言も言い及ぼうとはしなかった。

茂吉はその点積極的であつた。子規の短歌に関するかぎり、彼の眼をのがれた秀逸は一首も残っていないかと思う。少年時代に、貸本屋から『子規遺稿竹の里歌』を借りて読み、

なむあみだ仏づくりがつくりたる仏見あげて驚くところ

木のもとに臥せる仏をうちかこみ象蛇どもの泣き居るところ

水茎のふりにし筆の跡見ればいにしへ人はよくかきにけり

などの、少しも言葉を飾ろうとしない、平易な表現の短歌を読んで、こんなのなら自分も作れるだろうと思って、そういう歌を模倣して作り出したのだという。だから彼の短歌観の中核の、もっとも奥深いところに、子規は鎮座していた。こういう歌を挙げながら、茂吉は言っている。

「私は『竹の里歌』を読むや否や、かういふ種類の歌を好いた。そして先生の歌は成程偉いとおもつた。従来の歌以外にかういふ歌の境地もあるかと思つた。そして時々模倣してさういふ類の歌を作つた。いまは余りさういふ歌を作らぬけれども、たまたま詠みいづることがある。さうするといかにもなつかしい。

『象蛇どもの泣き居るところ』の句に逢著して、実に驚歎したことを思ひ出しながら。そして『泣き居るところ』も『よくかきにけり』も写生であつて、よくその性命を捉へてゐる、同時に作者の氣持がいかによく表はれてゐるかに感歎しながら。」（『正岡子規の歌』）

こういう歌のうまみの、自信にみちた、強引な頌揚者であつた茂吉がいなかったら、子規のこういつた歌は長いこと黙殺の憂目を見たかも知れない。余韻とか余情とかいつた古い短歌の情緒からは全く切り離されて、言いたいことを明瞭端的に言い放つたなかに、ほのぼのとユーモラスなものが浮び上ってくるのである。短歌的なものを捨てたところに、新しく一種の人生的味わいが甦つてきた。

茂吉はさらに、俳句のことを言うのは少し恐ろしいと言いながら、「俳句についても独断言を有つてゐるから」と言つて、子規の俳句を挙げる。

#### 五月雨や上野の山も見飽きたり 鶏頭の十四五本もありぬべし

といった句を示し、「これから子規の進むべき純熟の句がはじまつたのである。もう寸毫も芭蕉でも蕪村でもないのである」と言つて、俳壇の不明を攻撃する。「然るに此句は碧梧桐虚子選の子規句集に収録されてないばかりでなく、俳壇にゐるほかの人も真に此句を論じたことはない。子規を祖述すると云つても何を祖述するのか。僕にはどうも変に思はれる。また『子規なんかもう古いよ』などといつて妙な風な日本語でないやうな日本語を並べて納まつてゐるのは僕にはどうも変に思はれる。（大正五年十一月二十九日夜。石楠のために）」（『童馬漫語』『俳句寸言』）

これは「石楠」という俳句雑誌に書いているのだから、俳壇への斬込みと言つてもよかつたが、俳人たちは黙殺した。虚子は昭和十六年に刊行した岩波文庫版『子規句集』に、「五月雨や」は選んでいるが、「鶏頭の」は選んでいない。この二句に関するかぎり、選択の意味は、「鶏頭の」の方がずっと大きい。

私はかつて、虚子門の故原石鼎に、この二句についての感想を聞いたことがある。石鼎が、どちらの句も初めて読むといった顔をしたのは意外だったが、彼は「五月雨や」については、「見飽きたり」というのは当り前で、「飽かなくに」と言つてこそ句になるのだと言つた。「鶏頭の」については、鶏頭は「十四五本もありぬべし」といった具合に生えるものなんだよ、と言ひ、「五月雨や」よりは趣味のある句だと認めたようであつた。

だがともかく、高名の原石鼎にして、子規の句などにはさまで深い関心を払っていないということが分った。茂吉の言うように、「子規なんかもう古いよ」と言っているようであった。虚子以後の自分たちの俳句は、ずっと進んでいることを自負していた。「五月雨や」にしても、「鶏頭の」にしても、あまりに単純な明治の写生俳句と見えた。

戦後においても、「鶏頭の」の句が如何に愚かしい句であるかのあげつらいがあった。論者は「枯菊の十四五本もありぬべし」「鶏頭の七八本もありぬべし」あるいは「沙魚舟の十四五艘もありぬべし」などと言い換えてみても、趣味の高下はないはずだと言った。だがそれは、詩の聴覚的效果について、まったく音痴の理解力を暴露したものであった。その上に論者が、『病牀六尺』の世界に投げこまれて、爛々と凝視の眼を輝かせている作者の強い意志力に思い及ばない議論であった。そして真赤に燃え立った、無骨で、平凡で、ぶざまで、強靱な鶏頭の小群落が形づくる鮮かな心象風景を思いやることのない議論でもあった。

この一句が作り出すものを否定するなら、子規の晩年の文学的世界はすべて否定するより外はない。そして、それを指摘したのは茂吉であり、黙殺したのは虚子であった。それは、茂吉が子規の晩年の芸術的境涯を再構築して見せ、虚子は再構築することを拒否したことを意味する。なぜなら、それを構築することによって、虚子の世界が相対的に低下することを防ぎたいからである。それは子規の晩年の境位からの逸脱によって、構築することのできた世界だからである。

## 五

だが、子規の否定者として、もっと強力な人たちがいる。それは、主として近代の詩人たちの間から放たれる否定言である。その否定言を反論するために、茂吉は『北原白秋の正岡子規評』なる一文を書かねばならなかった。

白秋は子規に対する不信の言辞を、それまでも度々洩らした。「茂吉君あたりのやうに盲信したくない」と言った。茂吉は盲信でなく正信であると言い、盲信と受取られるのならその客観的証拠を示せと言った。白秋はこれに答えなかった。

昭和二年十二月号の「日光」に、白秋は蒲原有明を訪ねて聞きえた詩歌縦横談を、『ある日の閑談』と題して書いた。その中に有明の言葉として、「いつたい、正岡子規は詩人ぢやありませんや、改革者でさあ、どうしてまた白秋君がアルスに子規全集を出したかさつぱりわからない」と言い、それに答えて白秋もまた、「僕は十分不賛成だつたのです。それに短歌の第一の改革者だとか、明治の詩人の第一人者だなどといふ広告文を見て、心から公憤を感じたものです。全く子規は詩人としては本質的に影が薄く思ひます。芭蕉や蕪村に較べるのは不倫極まるものでせう。僕はアルスへ躍り込んで行つてたうとう癩癪を爆発させて了ひました」と言った。子規が詩人でないという点で、この二詩人は意見が一致しているのである。有明の言葉には、また次のようなものがある。「短歌も今のやうでは滅びますよ。写生一点張りではかうなるのは当然でせう。アララギがいけなかつたのだ。第一、想像や幻想を排してどこに詩が匂つて来ますかね。それに較べると明星の短歌革新は大したものでした